



「見たり、聞いたり、探ったり」No.237

通算 No.389

青木 行雄

東京・豊洲「スターアイランド」

未来の花火大会はこうなるか

今年2019年(令和元年)7月20日(土)この日から50年前の1969年(昭和44)7月20日、まさしく同日アポロ11号が初めて月面着陸を成功させた歴史的な日であったが、この日に合わせて、この「スターアイランド」は宇宙への航海をしているような興奮を体感出来るようにストーリーを折り込んで、テーマが「2019: A SPACE ODYSSEY」(トゥーサウザンドナインティーン アスペース オデッセイ)でさらにスケールアップを図った大会というのであった。

いま日本の夏の風物詩である花火大会に変化が起きているという。長年続いた花火大会開催中止や規模縮小が増える一方、音楽フェスやグルメイベントと融合した新興の花火が人気を集めつつある。その中でも象徴的なイベントが2017年(平成29)にスタートした「スターアイランド」であった。日本の伝統花火と、3Dサウンドやライティングなどの最先端テクノロジー、ショーパフォーマンスを組み合わせ、無料観覧エリアを設けず完全有料制を取り入れているのが特徴で、毎年人気を伸ばしている。無料で楽しむイメージが根強い花火にあって、その対極に位置する完全有料の花火ショーが好調というのだが、理由はなんだろうか。

大規模な花火大会と規模を縮小する花火大会、その二極化が進む中において、この「スターアイランド」の出現は鮮烈なものであったという。未来型花火エンターテイメントを掲げ、花火大会の常識に反して入場は完全有料制を採用、最も安い席種でもチケット代は1人8,000円からであるにもかかわらず、2017～2018年共に1万5,000枚のチケットは完売したという。2018年(平成30)末には早くも海外進出を



スターアイランド入場ゲートである。まだ早かったなので、入場者は少ないが、ここを1万5,000人が入場した



会場のイスが並んでいるところ。まだ早かったのですが、満員となった。この場所の1席、15,000円

果たし、シンガポールのマリーナ・ベイを舞台に約2万1,000席が完売。86か国の人々が来場するなど好調を極めたという。この成功を受け、サウジアラビアでもこの「スターアイランド」の開催に基本合意したという。その他にも数か国からこの「スターアイランド」の実施のオファーが寄せられ、国内だけでなく海外からも注目を浴びる場所となったようである。

3年目となる今年の東京開催は、会場をお台場から「豊洲ぐるり公園」へ移動し、会場の規模はお台場に比べ1.5倍に拡張したらしく、打ち上げられる花火との距離も、観覧席から約900mの距離から約200mに近づき、さらに迫力あるパフォーマンスが用意された。夏の大型イベントが数多く開催される中であって、わずか3年で世界規模へと成長した勢いはすごいという他はない。

来場者数で競わず有料席のみ「伝統を守るには、アップデートが必要」これまでの花火大会の常識からかけ離れたイベントとなった「スターアイランド」、ダンスミュージックとDJプレイが最高潮に盛り上がったクライマックスの時間帯に花火を打ち上げて会場の一体感を演出した。これは他では見られない凄い光景であった。

この大会の演出者によると、

花火師との打ち合わせの中で、無料の花火大会が近年、協賛集めや警備コストの増大などで立ち行かなくなっている場合もあるらしい。これまで無料だったイベントをただ有料にするというだけでは、客の立場からすれば納得できないはず。花火という伝統を続けていくからには、お金を払ってでも見る価値のある花火でなくてはならないのである。

そこで、既存の花火大会でも有料観覧席が普及しつつあるが、この有料化の形に違和感を持つ方もいると思う。この東京の摩天楼の美しさのように、あって当たり前のものでされている景観にも着目して、「スターアイランド」は東京湾と都心の摩天楼という光景に、花火をはじめとする様々な演出を加えるという、従来の花火大会からすれば異端ともいえる構成となったのである。

花火だけではない総合的な演出を体験してもらおうという意図から、来場者の上限を設定し、2019年（令



東京湾の会場近くから見た夜景。あのシンガポールのマリーナ・ベイに似たところがあるが、屋上がつながっていない



豊洲の「豊洲ぐるり公園」に設備された、スターアイランドの会場レイアウトである。上部にステージが6か所ある。ここは新豊洲市場の奥にある公園です



7時30分にオープン。花火と光とサウンド、舞台にめまぐるしく、シーンは変わっていく



音楽に合わせて光と花火がコラボする

和元年7月20日)は会場をお台場から「豊洲ぐるり公園」に移したことで会場規模は拡張し、来場者の上限を設けつつも規模、キャパシティとも拡大したのである。

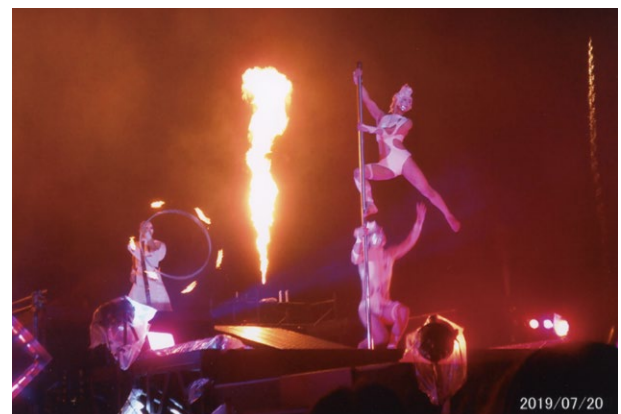
「数十万人という人が来たらそれはうれしいですが、その人数に東京湾を一望できるナイトロケーションや3Dサウンドやパフォーマンスを合わせた総合的な演出を見せることは難しい」と演出者は語るが、既存の大規模な花火大会と動員数で競うことでなく、コンサートや舞台の観劇のように提供するコンテンツをすべて楽しめることを前提としたイベント運営は、従来型の花火大会と一線を画しているし、すごい迫力があって、見応えがあった。

花火をショーの“名脇役”にして、複合的な演出で人気を博しているのだ。

イベントそのものも、花火をメインとして打ち出す構成ではなく、競技花火大会を始め、日本の花火大会は花火そのものの美しさや芸術性を売りにしたものが主流であるが、「スターアイランド」は、花火だけではなく、水域でのパフォーマンスやポールダンサーやストリート、ヒップホップにコンテンポラリーといった様々なジャンルのダンサー、さらにロンドンオリンピックにフェアリージャパンとして出場した新体操選手を含めた新体操チームや、BMX、スティルトのパフォーマンスが新たに追加、多岐に渡るパフォーマーが出演した。いずれも、単体のショーの主役として成立するコンテンツばかりを集めたのである。



海上から炎や光が交差して出現する



炎がポーといたるところから出現し、会場を盛りあげる。海上からは花火が夜空を照らす

これらを「スターアイランド」という1つの舞台の演出として使うことで、花火単体での楽しみ方とは違った新たな魅力を生み出すことに繋がっていた。イベント名にも「花火」を冠していないのも、花火だけがメインコンテンツではないという思惑からだという。

こうした独創的とも思える取り組みの裏には、日本の伝統行事である花火を残していこうという思いが目に見える。「海外では花火大会のような長時間花火を鑑賞する文化があまりなく、花火は特殊効果の一部でしかない」という。そうしたところに「玉屋・鍵屋」の花火大会をそのまま持って行ってもうまく行くはずがない。本当に伝統を残していくには、今の時代にフィットすると同時に、グローバルに伝わる“翻訳”がないと伝わらないのではという思いがある。

「スターアイランド」が音楽やパフォーマンス、花火のコラボレーションを軸に据えた背景には、当初から海外進出という目論見もあったようである。それが狙い通り、シンガポールで行われた「STARISLAND SINGAPORE COUNTDOWN EDITION」(スターアイランド シンガポール カウントダウン エディション)は初の海外開催にもかかわらず成功した。マリーナ・ベイの会場外にも約50万人が訪れたという。この成功を受け、シンガポールでは2020年末まで3年連続でこの「スターアイランド」の開催が決定しているというのである。

この「スターアイランド」はこれまでの花火にない総合的なショーとして演出があるからこそ、多くの花火大会が開催される夏の東京にあっても支持を得るに至っている。だが、一方で、言葉や映像ではなかなかイベントの魅力を伝えきれないところがあるだろうと思う。

主催者は話す。花火をはじめ、クリエイターみんなで作り上げた「スターアイランド」の持つ圧倒的な没入感は、どうしてもその場で体験しないと分からないんです。今はネットでなんでも見られる時代になっているので、まあこんなものかと体験したつもりになっている方も多いかも。でも、実際に会場に行くと全く違うのである。

体験者の私がいうと、見るもの、聞くものすべて、今までの花火大会と異にして、あの東京の摩天楼とレインボーブリッジ(大橋)ネオンきらめく絶景のロケーションをバックに繰り広げられる、伝統花火と最先端の3Dサウンド、舞台によるショーパフォーマンス、水上のショー等々、五感を刺激し、感動、感動の体験で、圧倒され続けたのが本音であった。

2019年7月20日(土)、新木場を午後3時頃出て、地下鉄有楽町線、豊洲駅より、モノレール「ゆりかもめ」で2つ目の駅「豊洲市場」下車、関係者の誘導により「豊洲ぐるり公園」の会場へ廻る。下車より徒歩で15分程かかった。ゲートを入場するとそこは「スターアイランド」の世界。来場者に楽しんでもらう為の施設が用意されていた。海岸に接続された、海上ステージが6か所、他にいろいろの設備が用意され、入場料の料金にかなう席が用意されていた。



摩天楼をバックに水圧で空を飛ぶ、パフォーマンス



炎が一瞬に噴き出て、パフォーマンスが演じる。どんどん変わっていく

いつも花火大会に参加すると帰りが心配になるが、今回は席により、順次案内され、全く混乱はなかった。しかし帰りは豊洲駅まで誘導され、50分程かかった。

大自然の景観をバックにとてつもない光と音響とパフォーマンス、大パノラマと舞台とショーと花火が同居するこの「スターアイランド」は感動でした。

令和元年 8月23日



未来型花火エンターテイメント

「スターアイランド 2019 (STAR ISLAND 2019)」

出典：<https://www.fashion-press.net/news/50208>